

活 動 報 告

2004年度人文学研究所：映画上映と講演「現代アジアと家族」報告

人文学研究所主催（人文学会共催）で「現代アジアと家族」と題して、11月18・19日に映画上映と講演会を開催した。

講演会は社会評論家の芹沢俊介氏を迎え、聴衆は180名前後であった。演題は「現代日本と家族―子どもたちの生き難さをめぐって―」であり、芹沢氏は現代日本の家族が遭遇している問題に、〈自分〉意識と個人の孤立化という視点からアプローチされた。講演の後、時間の制限がありながらも活発な質疑応答があり、また著書の販売とサイン会も行われた。

映画上映と講演会の日程とプログラムは下記の通りである。（文責 伊坂青司）

■講演会

日 時：11月18日（木）13:00～14:30

テ ー マ：「現代日本と家族 ― 子どもたちの生き難さをめぐって ―」

講 師：芹沢 俊介 氏（せりざわ・しゅんすけ）

講師略歴：1942年、東京生まれ

社会評論。主に子ども問題、家族問題で発言を続ける。著作に「家族という暴力」「母という暴力」「子どもたちはなぜ暴力に走るのか」その他がある。

■映画上映

11月17日（水）

「山の郵便配達」1999年（中国）10:30～（93分）

監 督：フォ・ジェンチイ

キャスト：トン・ルウジュン，リイウ・イエ，ジャオ・シイウリ

解 説：1999年中国金鶏賞（中国アカデミー賞）最優秀作品賞。父と息子，息子と母，妻と夫の関係をじっくりと描くことで，家族のあり方を問い掛ける。「絆」というテーマが悠久たる中国の大自然の中に叙情豊かに綴られる。

「夏至」2000年（フランス・ベトナム）13:00～（112分）

監 督：トラン・アン・ユン

キャスト：トラン・ヌー・イエ・ケ，グエン・ニュークイン，レ・カイン

解 説：母の命日に仲のいい三姉妹が集まる。だが，彼女らはそれぞれに秘密を抱えている。やがて，母の秘密の恋を知った彼女らは，戸惑いの中で自分自身と向き合っていく。

「祝 祭」1996年（韓国）16:20～（102分）

監 督：イム・グォンテク

キャスト：アン・ゾング，オー・ジョンヘ，ハン・ウンジン

解 説：老母の葬式の喪主となった流行作家と，彼が体験する昔ながらの式次第で行われる葬儀の進行を見つめ，集まった人々の人間模様を描いたドラマ。

11月18日(木)

「A. I.」2001年(アメリカ) 14:40～(143分)

監督：スティーヴン・スピルバーグ

キャスト：ヘイリー・ジョエル・オズメント，ジュード・ロウ，フランシス・オーコナー

解説：愛をインプットされながら，母親に見捨てられた少年ロボットの心の旅を描く感動作。

国際シンポジウム報告

国際シンポジウム「道教と日本文化」報告

「道教と日本文化」と題した国際シンポジウムが、2004年11月5・6日の二日間の日程で、中国杭州市にある浙江工商大学を会場に行われた。主催は浙江大学日本文化研究所と中国日本史学会であり、神奈川大学人文学研究所は共催団体として名を連ねた。また参加者は、中国からは北京大学、復旦大学、武漢大学、南開大学、中国社会科学院、天津社会科学院、日本からは京都大学、大阪大学、東北大学、九州大学、早稲田大学、その他、韓国の江原大学、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学、フランスの国立遠東学院などから、100名前後の研究者に上り、文字通りの国際シンポジウムとなった。神奈川大学人文学研究所からは、鈴木陽一教授、前川理子専任講師、前田禎彦専任講師、そして私の（伊坂青司）4名が参加した。

シンポジウムは、「道教と日本文化」と題されたとおり、中国の伝統文化としての道教が日本文化に与えた影響を検討することをテーマにして、様々な研究分野からのアプローチが行われた。全体の基調報告に続いて、「宗教と民俗」「典籍と漢字」「思想と文化」の三分科会に分かれ、それぞれの分科会では報告と討論が行われた。また二日目のパネルディスカッション「学際的・国際的視野から道教を見直す」では、パネリストがそれぞれの専門分野を踏まえて、道教文化へのアプローチを行った。二日間を通して充実した報告と活発な討論が行われ、道教と日本文化の関連をテーマとした国際シンポジウムとしては画期的なものとなった。浙江工商大学と浙江大学日本文化研究所の関係者のご尽力に心より感謝申し上げる。

以下、二日間にわたる全体プログラムを記すこととする。

【11月5日】

基調講演：新川登亀男（早稲田大学）「日本古代と道教」

王勇（浙江大学日本文化研究所）「鑑真渡日と泰山府君」

東儀俊美（日本芸術院）「宮中祭祀と雅楽」

分科会：宗教と民俗

佐藤弘夫（東北大学）「日本中世のコスモロジーと道教の神々」

ロベル・デュケヌ（フランス国立遠東学院）「恵比寿－蝦夷：運命の神様と彼の「野蛮人」故郷」

方琳琳（浙江大学）「飛鳥・奈良時代の服飾から見える道教要素」

宇雁（浙江教育学院）「道教の「会」と祇園の「祭」

真弓常忠（皇學館大学）「道教祭祀における道教的要素」

藺田稔（京都大学）「妙見信仰と道教」

野本覚成（天台宗宗典編纂所）「道教と密教の習合事相」

米山俊直（京都大学）「えびす信仰と道教」

三宅善信（金光教春日丘教会）「金神の再発見：道教信仰の近代日本における展開」

分科会：典籍と漢字

黄昭淵（韓国江原大学）「徳川日本と朝鮮の道教受容」

泉敬史（札幌大学）「春桃原をめぐる考察」
陳小法（浙江工商大学）「策彦周良と明代道教」
水口幹記（早稲田大学）「中国における風角書の変遷と日本における風角の不受容」
管寧（中国国家博物館）「『神仏之争』と陰陽占筮の受容」
矢羽野隆男（四天王寺国際仏教大学）「黄遵憲の神道研究―道教との関連で」
王宝平（浙江工商大学）「『日本国志』「神道」項の典拠について」
河野貴美子（早稲田大学）「善珠撰述仏典注釈書における老荘関係書の引用」
王金林（天津社会科学院）「日本出土の木簡と銅鏡に見られる道家文化の影響」
欽偉剛（四川大学）「福永光司と日本の道教研究」
何華珍（浙江財経学院）「日本漢籍と漢語俗字」

分科会：思想と文化

後藤昭雄（大阪大学）「日本の平安朝漢文学における神仙思想の受容」
吉原浩人（早稲田大学）「大江匡房の養生思想」
王麗萍（浙江財経学院）「入宋僧成尋と道教」
木幡みちる（早稲田大学）「道教をめぐる唐，朝鮮，日本の国際関係」
仁木夏実（大谷大学）「平安時代後期における庚申信仰について」
徐水生（武漢大学）「道家思想と日本近代哲学」
劉岳兵（南開大学）「夏日漱石の道家意識」
南谷美保（四天王寺国際仏教大学）「日本の雅楽と神仙思想」
韓昇（復旦大学）「五行と古代中日における職官の服色」
江静・吳玲（浙江工商大学）「道教医学の〈喫茶養生記〉に対する影響について」

【11月6日】

パネルディスカッション「学際的・国際的視野から道教を見直す」

パネリスト（報告順）：伊坂青司（神奈川大学），佐藤弘夫（東北大学），黄昭淵（江原大学），W・ヴァンドウワラ（ルーヴェン・カトリック大学），Allan Grapard（カリフォルニア大学），藺田稔（京都大学），南谷美保（四天王寺国際仏教大学），韓昇（復旦大学）
（人文学研究所所長 伊坂青司）

浙江大学日本文化研究所・中国日本史学会主催，浙江工商大学日本語文化学院共催

『道教と日本文化』国際シンポジウム参加記

昨年秋，2004年11月，中国浙江省杭州で，一昨年の「サーズ」が原因で延期となっていた『道教と日本文化』国際シンポジウムが二日間にわたって開催された。

大会の主旨は，中国の伝統文化である道教が日本にもたらした広範かつ深い影響を歴史・文学・宗教・芸術などさまざまな分野において検証し，東アジア世界における中国文化の国際的価値を明らかにするという点にある。中国からは約50名，日本をはじめとする諸国からも50名以上の多数の研究者の参加を得た大規模なシンポジウムで，日本の歴史・文化をテーマとした中国における学会としては，おそらくこれまでで最大規模であろうとは，大会の実現に尽力した王勇氏の弁である。

初日，浙江工商大学総長胡祖光，浙江大学日本文化研究所所長王勇，中国日本史学会名誉会長王金林，

浙江道教協会会長高信一各氏の熱烈な歓迎の辞とともに大会がはじまった。

午前は、基調講演として新川登亀男（早稲田大学）「日本古代と道教」、王勇（浙江大学）「鑑真渡日と泰山府君」、東儀俊美（日本芸術院）「宮中祭祀と雅楽」の三本の報告が用意されていた。新川氏は日本古代における道教受容をめぐる研究の推移と課題を述べ、王勇氏は中国における最新の研究成果も折り込みながら鑑真の渡日をめぐる諸問題を明らかにされた。また、雅楽の大家であられる東儀氏は、現代の皇室祭祀のあり方にも触れながら宮中祭祀にあらわれる道教の影響を指摘された。いずれも基調講演にふさわしい視野の広さと鋭い問題意識をもった報告であった。

午後は「宗教と民俗」・「典籍と文字」・「思想と文化」の三つの分科会がもうけられ、私は、そのうち「思想と文化」に参加した。10本にわたる報告内容をいちいち紹介する余裕はないが、時代は古代から近代にいたるまで、分野は歴史・文学・芸術の各分野にわたって周到に準備され、力のこもった報告と短いながら活発な討論がくりひろげられた。また、通常、お目にかかれない、各分野の第一線で活躍する研究者の方々の報告を拝聴する機会を得たことはこの上ない喜びであり、刺激であった。うち5名の方は中国の日本研究者であったが、今回はレジュメ・報告・討論ともに日本語が用いられており、私のように中国について関心はありながら中国語はまったく解さない者にとってはたいへんありがたかった。しかし、そのぶん、いかに専門とはいえ中国の研究者の方々の負担は大きなものがあったのではなかろうか。

二日目は、各分科会の総括の後、パネル・ディスカッションが行われた。「学際的・国際的視野から道教を見直す」というテーマにもとづき、本学の伊坂青司先生も加わった10名の方をパネリストとして大会全般の成果がヨーロッパとの比較なども含めて多角的に論じられた。その後、浙江工商大学党委書記王光明、神奈川大学人文学研究所長伊坂青司、四天王寺国際仏教大学南谷美保、日本神道国際学会理事長梅田善美、浙江大学日本文化研究所長王勇の各氏の挨拶を得て、大会は無事終了した。

今回のシンポジウムは、日本における道教受容をテーマにかかげ、中国・日本の歴史・文学・宗教・芸術などさまざまな分野をおおう多数の研究者が一堂に集い、その成果を論じたという点で、おそらく類をみない学会であったと思う。これによって、中国の伝統文化・宗教としての道教が、これまでの予想以上に日本社会の基層のいたるところに浸透していた様相が具体的に明らかになったことが、シンポジウム最大の成果であったと思われる。ただし、その受容が、(仏教に比べても)あくまで部分的・選択的な受容であったことも否めず、道教受容の全体像についてはなお曖昧さも残った。今回のシンポジウムを機に議論がさらに活性化し、深められることを強く期待したい。

なお、大会終了後、主催者のご好意で、多くの観光客でにぎわう秋の杭州を周遊することができた。おだやかな秋の日ざしに西湖がきらめくさまは美しく、しばし見る者の心をなごませた。また、湖畔の丘陵に位置する道観では道士による祈祷を見学することもでき、現代に生きる道教のすがたをかいま見る機会を得たことはとくに貴重な体験であった。

最後になったが、「サーズ」をはじめとする障害をのりこえてシンポジウムの開催に尽力され、また、心から私たちの参加を歓迎してくださった浙江大学・浙江工商大学をはじめとする関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

(前田禎彦 2004年11月5日、6日 浙江工商大学)

「道教と日本文化」国際シンポジウム報告

昨年一月五・六の両日、中国浙江省杭州市の浙江工商大学で浙江大学、浙江工商大学、四天王寺国際仏教大学、神奈川大学人文学研究所による国際シンポジウム「道教と日本文化」が開催された。中国

側研究者約五〇名と、日本を中心にベルギー・フランス・ノルウェー・アメリカ・韓国などからの研究者と随員あわせて約五〇名が出席した。本研究所からは、伊坂所長、鈴木（陽一）、前田、前川の四名が参加した。初日は基調講演が行われた後、分科会に分かれての発表、二日目は分科会のまとめとパネルディスカッションが行われ、伊坂所長がパネリストとして参加した。シンポ終了の翌日には杭州市内の道教関連施設を訪問し、道士との質疑応答、道教儀式の見学などが行われた。

シンポジウム第一日目午後の分科会は、「宗教と民俗」「典籍と漢字」「思想と文化」の三テーマに分かれて行われたが、私（前川）は主に「宗教と民俗」に参加した。中国の研究者、フランスなど海外からの参加者による発表のほか、日本からは神職、僧職、神道系教団の教会長など宗教の現場にも関わる立場からの発表数本があり、スライド等を使つての興味深いものもあった。日本への道教の影響というテーマからいえば古代や中世が中心で、それ以降の時代になると神道や仏教の儀式等に道教的要素が混入されているといった報告が目立った。

最終日に行われたパネルディスカッションは、日本の道教研究における問題点を共有しつつ、将来の研究の方向性を探るものとなった。日本の道教研究の問題は、教団宗教としての道教が日本に入らなかったために「日本の道教」の輪郭が明確でないことから多く生じている。中国道教を基軸に日本の道教をその派生として捉え、日本宗教内に散見される（中国の）「道教的要素」の析出に終始しがちである。そもそも日本の宗教は、道教とほかに神・儒・仏の諸教を習合、編成・分立しつつ時代時代で形成されてきたと考えることができるが、そうした中で道教の断片を探し出して“日本にも道教があった”ののだと言うような研究にどのような意味があるのだろうか、というものである。

今後の可能性については、パネリストから次のような指摘がなされた。道教は複合的な宗教であり、日本において高次の教義から日常のレベルまで影響しているが、今後民衆生活への関心が高まるとき道教研究はより重要性を増してくる。そのため、個別的な研究をこえて、日本文化全体における位置づけ、相対的で歴史的な変容を視野に入れた研究を進める必要があるというもの。

さらに、国際的な視点で道教を見直すべきことも示唆された。古代において中国からの道教や仏教に対する反応が東アジア各国で異なっている。道教単独でみるのではなく儒・仏・道の三教のひとつとしてとらえ、各国のさまざまな反応の仕方を比較していくことは、例えば古代国際関係史にとって魅力的な課題になる。古代の日本人は道教を仏教に対するものとして把握した。日本の仏教僧にとって、「中国」固有のものとされていた道教を斥け、インドから中国に入った仏教を入れることは、中国を超え、相対化する意味をもつものであった。また国内をみれば、天皇には、神道成立時に道教を取り入れることで仏教に対抗するという姿勢がみられた。このように、日本に道教は存在しない／拒否された／一部台頭が見られたというような単純な結論ではなく、教団宗教としての道教を拒否しながらも場合によって一部摂取しつつ、どのように国家と社会、宗教や習俗をつくっていったかという見方においてこそ、日本の道教とのかかわり方を考えていく意味がある、と指摘された。

今回のシンポジウムは、各国から多分野の研究者が集まる学際的な交流の場となった。日本の道教はその曖昧さ、枠のなさゆえにやっかいな研究対象でしかなかったかもしれないが、それだからこそ政治史、民衆史、文学宗教に関連する諸分野の研究者の協同・交流の場ともなって、学際的研究を促してくれるものだと感想をもった。

（前川理子）

2004年度人文学研究所活動報告

講演会要旨

1. 講演会アジアにおける探偵小説の誕生

① 中国における探偵小説の受容

報告者：鈴木陽一 教授（神奈川大学）

② 上海と探偵小説報告者：潘 建国 教授（上海師範大学）

日 時：5月10日（月） 17:00～

場 所：17号館216室（人文研究所資料室）

※潘教授の発表は通訳付きです。終了後は懇親会を行います。

（主催 神奈川大学人文学研究所）

■内容紹介

共同研究奨励費のプロジェクト「東アジアにおける近代探偵小説の誕生」により、上海師範大学潘建国教授を招請し、講演会と座談会を行った。はじめに鈴木陽一が探偵小説研究の現状と、その研究の意義について簡単な報告を行った。ついで潘建国氏は、上海における探偵小説など通俗文学の隆盛が、印刷業の発展と密接な関係があること、特に作家はしばしば自ら出版社を経営しながら執筆活動を続けていたことを、近代上海を代表する作家包天笑を例に挙げ、その状況を具体的に明らかにした（報告題名「民国時期上海偵探小説期刊述略」）。しかし、氏によれば、近代文学、就中通俗文学についてはほとんど研究がなされてこなかったため、探偵小説がどのような雑誌に掲載されていたのかも未だ必ずしも明らかではなく、まず基礎的な作業、日本の樽本照雄氏（大阪経済大学教授、雑誌『清末小説』及び「清末小説研究会」主宰者）が行っている書誌からしっかりとやらねばならないという指摘があった。また、氏自身が古書店で買い求めた雑誌の中には、これまで書誌情報のない雑誌も含まれており、書誌の作業一つとっても、より大きなプロジェクトが必要であるということが参加者の共通した意見であった。今後、東京－横浜－上海を機軸とした近代の研究は、日中両国の文学、歴史研究にとっても、また本学にとっても重要なテーマとなるであろうことを予測させる、意義深い講演会であった。

2. ①中国雲南省の留学生と雲南現代社会について

講 師：紅帆氏（中国雲南芸術大学助教授）

②長崎唐館の社会構造について

講 師：彭浩氏（復旦大学大学院生）

日 時：5月19日（水）16:00～18:00

場 所：17-216（人文学研究所資料室）

（人文学研究所・人文学会 共催）

共同研究グループ

日中関係史

「大小さまざまな研究会活動を基本に据えたい」とした昨年の決意が、今年も生かせなかったのは遺憾である。決意の持ち越しとなる。

3回開いた講演会は以下の通りである。うち王選さんの分は報告書を書いているので、それを再録する。

(1) 04.5.19

紅帆氏（中国雲南芸術大学助教授，本学研究員）「中国雲南省の留学生と雲南現代社会について」
彭浩氏（復旦大学大学院生，本学研修生）「長崎唐館の社会構造について」

(2) 04.9.24

易恵莉氏（華東師範大学教授）「私の近代日中関係史研究」

(3) 04.12.15

王選氏（731部隊細菌戦裁判原告団団長）「日本軍の細菌戦 — 中国浙江省被災地からの報告」

1937年から始まる日中戦争において、日本軍は731と称する部隊に毒ガス・細菌戦に備えた実験を行わせ、それを40年から使用した。講演ではその準備段階を紹介したあと、実際にペストの感染したノミを空中から散布して、その被害に遭った浙江省のいくつかの町の具体的状況および最近被害者が日本の裁判所に謝罪を損害賠償を求める裁判を提起した状況を詳しく紹介した。

文化のかたち

1. 研究組織名「文化のかたち」研究会 (Cultures as Gestalt)

2. 研究会の開催

(1) 第1回研究会

開催日：2004年4月28日（水）午後1時～

会場：神奈川大学17号館3階談話室

テーマ：「今年度の活動方針について」

出席者：秋山，小馬，中本，水野，大須賀，佐藤，石井，湯田。

(2) 第2回研究会

開催日：2004年5月26日（水）午後2時30分～4時

会場：神奈川大学17号館2階人文学研究所資料室

テーマ：「叢書の編集方針と来年度の国際シンポジウムについて」

出席者：秋山，水野，石井，廣瀬，湯田。

(3) 活動内容

今年度の叢書刊行を目指して、そのタイトルを「新しい文化のかたち 言語・思想・暮らし」とし、9名の執筆者と共に具体的な編集方針を検討して、お茶の水書房から2005年1月下旬に刊行すると共に、2005度11月に、人文研究所主催の国際学術シンポジウムをく世界から見た「日本文化研究」— 多文化共生社会構築のために>のタイトルで開催することなどを協議した。

(代表者 水野晴光)

西洋文化の受容—思想と言語

1. テーマ：近代日本における西洋文化受容の総合研究
2. 代表者：高野繁男
3. 活動内容：5年間をかけて読み続けてきた『明六雑誌』の成果を、昨年度、本研究所叢書20号『明六雑誌』とその周辺—思想と言語—』として出版した。その後、新たに近代初期の洋学資料を読む計画をもっているが、本年度は休会という状態であった。来年度は、再出版を期している。
(高野繁男)

物語研究会

1. 研究会の開催
 - (1) 第1回
開催日：2004年5月26日（水）
会場：17号館418室
テーマ：今年度の活動方針について
 - (2) 第2回
開催日：2004年10月27日（水）
会場：17号館418室
発表者：村井まや子「赤ずきんの内なる狼」

2. 活動内容

懸案であった構成メンバーが増えたこともあり、これなら活気ある研究の継続ができることをあらためて確認した。第1回の研究会では、とくに物語研究の領域における共同研究の成果について、これまでに刊行された著書の目次コピーなども配布して検討し、それらをもとにそれぞれが各自の研究領域についてコメントを加えた。第2回の村井氏の発表は、視点、方法、内容ともにじつに充実した発表で、議論が大いにもりあがった。次年度以降からは、外部から講演者を招くなどして、一層の活動の充実につとめたい。

(日高昭二)

各国地方史の比較史的研究—新編中国地方志叢書を中心として—

1. 研究テーマ：世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という狭い地域観念から見直すことを目的とする。年に4回の研究会を開き、各回、中国研究者と他分野研究者の二名の発表を行う。

2. 研究会の開催

- (1) 第3回研究会 2004年5月7日（金）人文研究所資料室（出席者：8名）

報告者：大里浩秋 『越鐸日報』に見る1912年春の紹興』

清朝打倒を目指す革命結社の一つである「光復会」の中心となった人物は紹興出身者が多く、紹興を拠点として活動した。彼らが創立した光復会の歴史を振り返りながらその経緯を解明するとともに、『越鐸日報』の辛亥直後の紹興に関する報道記事分から何を読み取れるかを考察した。

1. 紹興の町
2. 光復会成立100周年

3. 『越鐸日報』1912年1月3日創刊－27年3月

(2) 第4回研究会 2004年7月21日(金) 人文研究所資料室(出席者:9人)

報告者:谷川雄一郎 「新編中国地方志叢書に見る中国朝鮮族の歴史」

主に延辺に居住する中国朝鮮族に関する研究状況を報告するとともに、『延辺朝鮮族自治州志』に記載されている鉄道網に関する研究課題を提起した。

1. 延辺・朝鮮族の概況

2 『延辺朝鮮族自治州志』について

報告者:吉田隆 「ロカルノ人とチューリッヒの産業発達」

16世紀に始まった宗教改革によってヨーロッパ各地で自己の信仰を保持し、迫害から逃れるためにいわゆる「信仰の亡命者」が多く発生した。今回の報告はロカルノからチューリッヒへ移ってスイスの工業発展の先駆者となった信仰の亡命者についての分析と研究である。

1. ロカルノからの信仰の亡命者

2. 手工業都市チューリッヒと亡命者の受入れ

3. 信仰の亡命者の経済活動

4. ムーラルト家について

(3) 第5回研究会 204年12月10日(金) 人文研究所資料室(出席者:10名)

報告者:小林一美 中華ソヴィエト共和国に於ける「革命と反革命」,「客家と肅清」の関係について(1930-1935)

中国革命は日本に圧倒的な影響力を与え、反戦、反帝運動(学生運動)が起こったが、1980年代以降になると中国社会主義や毛沢東思想の実態が暴露されるようになった。

これにより中国共産党運動、とくに土地革命戦争(第二次国内革命戦争)期における肅清、集団殺戮が明らかになった。1930年代に起きたA B団肅清事件では数万人規模で肅清が行われた。そして被害者の多くの中国共産主義に貢献した江西省、福建省出身の客家であることが判明した。今回の報告では、中央革命根拠地内で1930年から1935年に起こった「肅清」の実態と客家との関係を分析し、明らかにした。

報告者:額賀清孝「ゾルゲと第一次世界大戦」

ゾルゲはスパイとして中国の上海や日本の東京を舞台として活躍した。日本では極秘の情報機密をソ連に流していたことから、逮捕され絞首刑となった。ドイツの裕福な家庭に育ったゾルゲが何故このような悲劇的な運命をたどったのかを彼の第一次世界大戦での体験とその意味を中心に考察した。

1. なぜゾルゲなのか

2. ゾルゲのスパイ活動とその歴史的意味

3. ゾルゲの思想的核心と第一次世界大戦

4. 第一次世界大戦の20世紀(戦争と革命の時代)に於ける影響

5. 1920年代に生きた青年,ゾルゲ

(佐々木恵子)

ポストコロニアル・スタディーズの冒険

本研究グループでは、本年度に以下のように国際学会で研究発表を行った。なお、本研究グループは、同研究発表をもって研究活動の締めくくりとし、解散することにした。

<研究発表>

The International Association of Historians of Asia: The 18th Conference,
Academia Sinica, Taipei, Taiwan, December 6-10, 2004

Panel 5-1: Colonial Modernity in Asia: Comparative Perspectives on
Japan, India and the Philippines

Chair: Yoshiko Nagano

Panelists: Chiharu Takenaka (Meiji Gakuin Univ., Japan)

Interpretation of Gandhi in Colonial Modernity

Toru Komma (Kanagawa Univ., Japan)

Latest Trends in Japanese Local History Studies

Yoshiko Nagano (Kanagawa Univ., Japan)

The Philippines and Japan: Their Comparative
Experience of US Occupations

Discussant: Akihiro Matoba (Kanagawa Univ., Japan)

(永野善子)

自然観研究グループ

1. グループ名：自然観研究グループ
2. 講演会の開催

開催日：2004年3月13日（土）

会 場：神奈川大学17号館216号室

発表者：川瀬 博（横浜市役所）

演 題：「ゲシュタルトとしての自然 — 都市の自然環境と自然観 —」

開催日：2004年1月26日（水）

会 場：神奈川大学17号館216号室

発表者：向 陽一（登山家、探検家）

演 題：「日本の自然はなぜ荒れたのか」

3. 活動内容

研究テーマを「自然観の変遷と展望」と決めて、次のような三分野において順次、講演会を行っている。1) 思想における自然観, 2) 文学における自然観, 3) 環境学における自然観。

(松本安生)

東アジア比較文化研究会

本研究会が掲げる研究テーマと参加する主要メンバーは、神奈川大学のCOEプログラムの活動にほぼ完璧に吸収されたかたちになったため、人文研の共同研究グループとして存続させていくことがたいへん難しくなっている。神奈川大学の共同研究奨励金をえた「環東シナ海伝承文化の総合的研究」プロジェクトの活動成果をまとめる中で、本共同研究のありかたを再度検討しなおし再出発を期したい。

(山口建治)

横浜研究グループ

1. 横浜研究 ― 横浜における多文化共生社会の創出に関する研究

2. 調査・研究会の開催

(1) 第1回

開催日：2004年9月7日（火）～8日（水）

会 場：上大岡ウィリング（横浜市社会福祉協議会研修施設）

テーマ：「メンバー間の問題意識の交流と今年度の活動方針について」

出席者：永野，後藤（政），大里，寺沢，富谷，後藤（晃），兼子，福元，横倉

(2) 第2回

開催日：2004年10月13日（水）

会 場：横浜市国際交流協会

テーマ：「外国籍住民に対する横浜市政策のヒアリング」

出席者：永野，尹（亭），平井，兼子，福元，横倉

(3) 第3回

開催日：2005年1月19日（日）

会 場：17号館基本科目共同研究室

テーマ：「3月下旬の国際シンポジウムについて」

出席者：永野，平井，富谷，大里，孫，福元，横倉，後藤（政）

(4) 第4回

開催日：2005年1月30日（日）

会 場：横浜市国際交流協会小ホール

テーマ：「よこはま国際性豊かなまちづくり市民フォーラム」

出席者：永野，後藤（政），富谷，後藤（晃），福元，横倉

3. シンポジウムの開催計画

2005年3月29日，30日に，韓国・中国籍住民の生活実態と出身国である両国の経済・社会状況を中心としたシンポジウムを行う予定である。

4. 活動内容

本年度は共同グループ発足の年であるため，9月に合宿を行って，メンバー間の問題意識の交流を行った。この合宿によって，メンバー間の多様な視点からの問題やテーマを相互理解するとともに，共通する問題意識の確認を行った。また，これにもとづいて，2回のヒアリングやフォーラムの傍聴を行い，横浜市の行政施策及び外国籍住民の生活実態について理解を深めた。3月下旬には，研究活動の一環として，シンポジウムを行う予定である。次年度の調査研究活動の基盤がつくられたと考えている。

（横倉節夫）

共同研究奨励金グループ活動報告

東アジアにおける近代探偵小説の誕生（2004年度の活動）

1. 2004年3月における調査について

予算年度では昨年のものであるが、昨年度の所報刊行以後の活動であったため、記しておくこととする。2005年3月15日から10日間の日程で、研究代表者である鈴木陽一が北京、南京、上海において北京大学、北京社会科学院文学研究所、南京大学、江蘇社会科学院文学研究所、上海師範大学などを訪問し、それぞれの機関の研究者と探偵小説研究について意見交換を行った。また、一部ではあるが資料の共同調査も行った。

このとき、上海師範大学の潘建国教授が鈴木に同行し、討論、調査に全面的な協力を行った。なお、潘教授は近代文学の専門家で、近年小説など通俗文学の隆盛と上海の出版業の発展について目覚ましい業績を挙げている若手研究者であり、本プロジェクトの中国における最も中心的な研究パートナーである。

2. 2004年5月10日における研究者招請と座談会の開催

潘教授は中国の近代文学、特に探偵小説などの通俗文学を掲載した雑誌が日本に大量に所蔵されていることから、その調査を強く希望していた。そこで、氏自身の調査と、日本側の研究者との意見交換のため、共同研究奨励費で招請し、本学で氏の講演と座談会を開催することとした（以下、参照）。また、雑誌を多く所蔵する東洋文庫、東大東洋文化研究所、横浜開港資料館などで資料調査を行った。

3. 資料収集と目次の作成

共同研究の資料として、最近日本で復刊されている1920～30年代の探偵小説、あるいは娯楽雑誌を購入している。また、中国に関しては、探偵小説以外にそのバックグラウンドたる上海近代の資料を系統的に購入している。さらに研究メンバーがコピーしてきた中国語の雑誌『偵探世界』のなかに納められた小説の目録を作成中である。

4. シンポジウムの開催

2005年3月19日、20日の両日、上海師範大学において日中両国の近代文学、近代史などの研究者が集いシンポジウムを開催する。このシンポジウムは本プロジェクトの一つの結節点となるもので、その成果の刊行を予定しているが、それで終わりとせず、東アジアの近代における大衆文化、或いは都市文化の研究という大きなテーマを掲げたより豊かで、総合的な研究の第一歩としたいと考えている。

多文化共生社会の創出と日本社会の変容 — 神奈川県横浜地域を中心に —

1. 共同研究メンバー

横倉節夫、大里浩秋、孫安石、尹亭仁、永野善子、後藤政子、後藤晃、兼子良夫、寺沢正晴、平井誠、富永玲子、阿部浩己、福元雄一郎

2. 研究目的

1990年代から、いわゆるニューカマーと呼ばれる在日外国籍住民の増加がみられるが、首都圏とくに神奈川県横浜地域でも顕著になってきている。こうした新しい状況の中で、在日外国籍住民の増加と定住化が日本社会の変容を促す要因として機能してくると共に、「共生」をめぐる課題が今後日本社会のあり方を規定する主要な問題の1つとして登場してきている。こうした問題意識から、本研

究は、神奈川県横浜地域を中心に、外国籍住民の状況と諸問題や、日本住民との経済的社会的文化的葛藤・交流の実態調査を通じて、多文化共生社会創出の可能性と地域社会の変容を解明し、今後の日本社会のあり方を考察しようとするものである。

3. 2004年度の研究活動経過

本年度は共同研究グループの発足年であることから、9月に合宿を行い、メンバー間の問題意識の交流を行った。これによって、メンバー間の多様な視点からの問題やテーマについて相互に理解を深めるとともに、共通する問題意識の確認を行った。これにつづいて、10月及び05年1月に2回、ヒアリング中心の調査活動を行った。この調査活動によって、横浜市の行政施策及び外国籍住民の生活実態について理解を深めた。また、3月下旬には国際シンポジウムを開催予定である。これらを基盤として次年度では具体的な調査研究を行う予定である。

加齢による認知機能変化の評価と、環境設計に関する研究 — サクセスフル・エイジングのために —

採 択 額：3,500千円

研究期間：2年間（平成16年度・平成17年度）

研究代表者	和氣洋美	外国語学部	教授	人文学研究所
研究分担者	三星宗雄	外国語学部	教授	人文学研究所
	山下昭子	外国語学部	教授	人文学研究所
	堀野定雄	工学部	助教授	工学研究所
	森みどり	工学部	助手	工学研究所
	後藤智範	理学部	教授	総合理学研究所
	張 善俊	理学部	専任講師	総合理学研究所

研究の進捗状況

1.研究会：ネット会議多数回

2.研究装置開発：高速視覚刺激発生装置(Viserge)

平成16年 5月末 発注

平成16年10月末 納品

プログラム作成中

触図提示装置

平成16年5月より 設計に関する打ちあわせ開始

平成17年1月 設計企画最終打ちあわせ 発注

3.ロービジョンに関する研究

オクルージョン・ホイル装着により視力を段階的に低下させ日常生活の各種状況（調理、買い物など）における動作の困難度と視力との関係について解析

新規購入主要文献解題

『スポーツの系譜』G 三星宗雄

1. (1) 明治期学校体育の研究 — 学校体操の確立過程 —

- (2) 能勢修一
- (3) 不味堂出版
- (4) 1995

(5) 我が国に欧米から多くの近代スポーツが入って来た明治初期は、我が国におけるスポーツ史および文化史の上で大変興味深い時代である。ところで明治政府は学制（明5）によって、教育の一環として小学校の教科に体術（体操）を設置し、学校体操（体育）を強く押し進めた。本書はこの体操科が明治期にどのような歴史的展開をたどって近代学校体操として確立したか、を入念な文献探索を通して明らかにしようとしたものである。

著者は明治11年に文部省が開設した体操の専門教師の養成所である「体操伝習所」の果たした役割を高く評価する。欧米から移入されたスポーツ・遊技が同所において初めてなされた訳ではないが、同所の卒業生によって全国に普及されたとする仮説は大変興味深い。またスポーツ・遊技と「体育」の接点である運動会も体操伝習所において初めて開催された（坪井玄道はそう主張する）とは断定できないが、そこを通して全国に広まったといったとする記述は明治期におけるスポーツ／体育文化の受容過程を考える上で参考になろう。

2. (1) 図説スポーツの歴史 — 「世界スポーツ史」へのアプローチ —

- (2) 稲垣正浩他
- (3) 大修館書店
- (4) 1996

(5) 豊富なカラーの絵と写真が盛り込まれたスポーツの図解歴史書である。絵と写真を眺めているだけでも結構楽しめる。序章「スポーツの編年史」、第1章「大航海時代とそれ以降の民族スポーツ」、第2章「近代スポーツの系譜」、第3章「スポーツの現在」、終章「スポーツ文化の問題情況」という内容。

スポーツ史であるから当然時間軸に沿って話が進められるが、紀元前2000年以上前のエジプトから始まる古代スポーツの紹介もさることながら、それらと現在世界各地で見られる民族スポーツとの比較が読者の好奇心をそそる。

一方副題からも分かるように、本書は「スポーツの世界史」を掲げている。単なる欧米中心のスポーツ史ではなく、世界各地起源の民族スポーツに多くのページが割かれていて、目を見開かされる。例えば、我が国の国技である相撲に関しても、モンゴル相撲ばかりでなく、韓国のシルム、中国・イ族、バハウ・ダヤク族（ボルネオ島）の相撲、西アフリカ・ヌバ族、バチヤマ族の相撲、グリーンランド・エスキモーやハワイの「座り相撲」もある。アマゾン・カマユラ族の女相撲もあり、驚きである。

近代スポーツの系譜も「種目」別になっていて大いに参考になる。また終章にある「競争原理を超克するスポーツの可能性」というテーマは未来のスポーツを考える上で避けて通れないテーマ。

3. (1) 球技用語事典

- (2) 櫻井榮七郎（編）
- (3) 不味堂出版
- (4) 1998
- (5) ここで扱われている球技は我が国で比較的良く知られている主な25種目であるが、同じ類型と考えられる種目も入れると260種目に及ぶ。それらの歴史、方法、競技会等について収録。最後に詳細な球技史年表と膨大な球技関係参考図書が付いている（全1037ページ）。ちなみに「野球」の項目を見ると、「ベースボールの日本名」とある（もちろんその後に詳細な解説がついています）。

（三星宗雄）

『近代日本のアジア教育認識・資料編 台湾の部』

近代アジア教育史研究会編 龍溪書舎 2004年2月刊

この資料集は、既刊の第Ⅰ部韓国の部全9巻、第Ⅱ部中国の部全22巻に続く第Ⅲ部全15巻として公刊された。内容は、明治後半、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本の各種教育雑誌、および一般雑誌や各種団体機関誌、女性雑誌等に収録されている台湾の教育文化に関する記事や論説を抽出、整理したものである。

この本の「はしがき」によると、日本で当時出版された各種雑誌には「従来中国や韓国、あるいは欧米の雑誌・文献類からだけでは十分明らかでなかったアジア各国、地域の具体的な教育状況を示す貴重な資料が数多く含まれている。同時に我々はまた、これらの記事や論説類をとおして、明治日本のアジア諸国の教育に対する蔑視＝停滞史観や、それと対応する形で、アジア教育の停滞打開の方途は「先進」日本の指導の下での革新以外にないとする優越意識、さらにはアジア諸国の教育に対する日本の積極的関与や教育主権収奪の構想が、漸次形成されていく経緯を窺うこともできるのである。」

そして、以上のような問題関心からこれに関連する資料を可能な限り取得したとする。

明治日本のアジア教育認識に関する基礎資料が全3部で完成した今、これらを活用したさまざまな関心からの研究が待たれているのである。

（大里浩秋）

所員の自著紹介

『フィリピン歴史研究と植民地言説』

著者：レイナルド・C・イレート，ピセンテ・L・ラファエル，フロロ・C・キブイエ
編者・監訳者：永野善子
めこん出版社 2004 年 8 月（389 頁）

本書は、意欲的かつ刺激的な研究活動を続け、それゆえにさまざまな論争を巻き起こしている、3人のフィリピン人研究者の示唆に富む論文8篇を選びすぐり翻訳したものである。この3人の著者とは、『キリスト受難詩と革命——1840年～1910年のフィリピン民衆運動』の刊行で、フィリピン革命史研究に新たな地平を切り拓き一躍脚光を浴びた、レイナルド・C・イレート。『契約としての植民地主義——初期スペイン統治支配下のタガログ社会における翻訳とキリスト教への改宗』で、植民地時代の分析にポスト構造主義理論を導入する意欲的試みに成功したピセンテ・L・ラファエル。そして、『挫折した民族——リサル，アメリカのヘゲモニー，フィリピン・ナショナリズム』で、アメリカ植民地時代に定説化したフィリピンの国民的英雄ホセ・リサル像の脱構築に挑戦したフロロ・C・キブイエである。



『近代漢語の研究』

— 日本語の適語法・訳語法』

高野繁男著
明治書院 2004 年 11 月（273 頁）

日本語の語彙研究が本格化して40年あまり、その初期の頃から参加した著者が、これまでの語彙研究にひと区切りをつける著書である。本書は、書名が示すように、日本語の造語法・訳語法の研究である。1つは江戸の蘭学の訳語、2つは

幕末・明治初期の訳語を扱っている。とくに、訳語が和語でなく漢語であること（なぜ、漢語か）。これを蘭学が行ったこと。その理由は、蘭学者の教養と漢字の機能 (morpheme → stem) によるものであること。そして、これが近代の英学に引き継がれたことなどを基本に論を展開した。こうして造語された和製漢語の研究は、語誌研究に限らず、今日も使用されている「現存語」に注目されるが、とくに造語法・訳語法の研究では、むしろ消えてしまった「消滅語」との比較によるのが条件になる。(現存語と消滅語) 理系の語は、前代を継承するが、文系の訳語造りは新たな挑戦になった。ここでは、とくに消滅語（どうして消滅したのか）の分析がカギである（理系と文系の訳語）などを論じた。〈目次〉のうち主な項目を示す。『医語類聚』の訳語／『哲学字彙』の訳語『百科全書』の語彙／『明六雑誌』の語彙「蘭学語資料の語彙」（『訳鍵』『蘭学訳撰』）



『米国留学紀行 — 英語教師の視点から』

石黒敏明著
リトル・ガリヴァー社 2005 年 1 月 20 日（207 頁）

過去35年の間4度の海外留学・研修の機会を得、その間書き綴ったのが今回の留学体験記である。第一回の留学は1970年に国際ロータリーの留学生としてオハイオ州ハイデルベルグ大学で、二回目の留学は1979年から1982年までフルブライト奨学生としてサンディエゴ州立大学とスタンフォード大学で学び、三回目は1993年から一年間、長期在外研究員としてハワイ大学で言語習得と喪失の研究に、四回目は2001年1月から3月まで短期在外研究員としてBYU大学で言語喪失

に関する研究に従事した。第一章の出発編では、虫や花や動物をじっと観察した様子が描写されている。出会い編後半は、教え子との米国での再会、劇的な分だけ私の記憶から消え去ることはない。第三章は米国内で生き続ける日本文化について。日本語学校や教会での日系アメリカ人との出会いは、日本人として外国に生きることを考える上でとても意義深かった。さらに滞在中に体験した社会問題は、今読んでも私にとって新鮮である。第四章はハワイ大学と BYU 大学の様子を客員教員の立場で内から観察したもので、趣味の面では日米のスポーツに関する違いに触れることができたのは意義深かった。第五章の家族編では子供との米国での経験、子供の成長記録などプライベートな記事が多いが、私にとって最も記録し記憶しておきたいことだったので、今回の留学紀行の最後に付け加えた。

人文学研究所共同研究グループ一覧

2004年5月26日現在

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	1. 明治期から現在までの日中関係の諸問題	1. 各自の関心に基づきの講演会、研究会（年4回程度） 2. 中国人日本留学史と日本人中国留学史に関する調査研究（科研究の共同研究） 3. 中国における日本租界史の研究を継続する。	大里	小林(一)・高野・中島(三)・松本(安)・日高・山口(建)・鈴木(陽)・木山・彭・大里・孫・〔菅〕田畑・〔非〕吉川(良)・李・楊(中)・梁・呉	17	2005年 予定
2	文化のかたち	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」を拓く。	今年度は、メンバーの刷新を計り、グループの個人の研究活動を活性化してゆく。具体的には、今年6月初旬にミーティングを開き、各メンバーの研究分野の共通課題ごとに研究班を編成して相互啓発を計る。 夏期休暇中に各研究班の意見を調整して本グループ『叢書』の発行を準備し、今後の活動の企画を練る。	水野	水野・〔学外〕中本・岩本・羽佐田・辻子・小馬・鈴木(修)・堤・〔非〕秋山・大須賀・〔非〕佐藤(江)・〔非〕米重・〔非〕八島・石井(三)・村井・ラクウェル・廣瀬・〔非〕湯田豊・〔非〕赤坂	19	2004年 予定
3	西洋文化の受容—思想と言語—	近代日本における西洋文化受容の総合的研究	本学共同研究奨励金(2001-2002年度)を受け、月例会・研究会・海外調査・国内調査と精力的に活動してきた。今年度はこれまでの成果をもとに論文集の出版を予定している。 出版原稿の読み合わせを兼ねた月例会・研究会と共同に、テーマにもとづいた講演会を外部講師を招いて行いたい。	高野	〔名〕岡野(哲)・鈴木(修)・伊坂・岡島・中島(三)・高野・〔非〕浅山・〔法〕吉井・〔経〕池上	9	2003年 出版
4	物語研究	物語の構造分析 歴史叙述と文学	1. 研究会：5～6回程度を予定。 2. ニュースレター：不定期だが、必要に応じ2～3回発行 3. 講演会：1回—学外から講演者を招請 4. 叢書刊行へ向けての準備：各人の執筆分担と執筆内容、全体の構成など具体化	日高	伊坂・鈴木(修)・鈴木(陽)・日高・小馬・鈴木(彰)・鳥越・村井・山口(ヨ)	9	2006年 検討中
5	各国地方史の比較 —新編中国地方志叢書を中心として—	世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という地域史的観点から見直すことを目的とする。	本学研究所は、中華人民共和国地方志叢書を大量に所蔵し、又現在も継続購入している。この貴重な蔵書を本学の中国研究者を中心に、読み、調べ、分析する。その為の研究会を開催し、また世界各地の研究者にも参加して頂き、現在の国家、民族、文明に取替ない文化の多様性を再発見する作業を行う。	小林	小林・大里・孫・岡島・〔経〕柳沢・〔菅〕廣田・佐々木・増子・谷川	9	未定

〔名〕
〔非〕
〔学外〕
名誉教授
非常勤講師
学外研究者

人文学研究所共同研究グループ一覧

2004年5月26日現在

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
6	ポストコロニアリズムの冒険	ポストコロニアリズムの現状と課題について	神奈川大学評論叢書『ポストコロニアリズムと非西欧世界』(お茶の水書房)の出版をふまえて個別研究を進める。今後の活動についての企画を練る。	永野	小馬, 尹(建)・後藤(政)・永野・(経)的場	5	無
7	自然観の研究	自然観の変遷と展望	以下の三分野について、順次、研究会および講演を行う。 1. 思想における自然観 (2000～2001年) 2. 文学における自然観 (2002～2003年) 3. 環境問題における自然観 (2004年)	佐藤(夏)	佐藤(夏)・伊坂・岩崎・奥田・鈴木(修)・中村(浩)・松本(安)・(営)復本・坪井	9	2005年度予定
8	東アジア比較文化研究会	日本, 中国, 朝鮮等の言語, 文学, 歴史, 民俗などを比較文化的視点から研究	1. 年に数回, 研究会を主催する。 2. 個別課題ごとに研究グループをつくり, 各種の研究助成に応募する。	山口(建)	佐野・木山・福田・中島(三)・日高・大里・彭・金・孫・浅山(非)・小馬・鈴木(陽)・高野・山口(建)・(経)河野・(営)田畑・(営)廣田・前田(禎)	18	無
9	スポーツの系譜	スポーツの起源, 構造(ルール), 機能に関する多次元的研究	1. 講演会を1～2回開催する。 2. 研究会を2～3回開催する。 色彩カテゴリー(色名を含む)示す色空間上の範囲について実験・調査的に測定し, それからのゆらぎについて社会意味論的な観点から分析する。また異文化間の比較対照を行う。	三星	三星・鈴木(陽)・矢野・寺沢・小馬・八久保・(工)長・五日市・山下・前岡・斉藤(直)	11	2006年度予定
10	色彩語の社会言語学的研究	1. 色彩カテゴリーの社会的ゆらぎに関する研究 2. 上記ゆらぎの異文化の対照学	色彩カテゴリー(色名を含む)示す色空間上の範囲について実験・調査的に測定し, それからのゆらぎについて社会意味論的な観点から分析する。また異文化間の比較対照を行う。	彭	彭・三星・小馬・堤・尹(亭)・松村・新木・加藤・徐・星野	10	未定
11	横浜研究	横浜における多文化共生社会の創出の研究	グローバル化の進展にともなう, 日本の経済, 政治, 文化が他の国, 地域に影響を及ぼしているが, 同時にアジア, 中国, 中南米各地から多くの人々が流入し, 日本社会に影響を及ぼしている。この共同研究グループは, こうした状況にある横浜一神奈川を主なフィールドにして, 多文化共生社会の創出にかかれる諸問題を学術的に研究することを目的としている。今日的な横浜学の形成に向けて研究を進めたい。	横倉	横倉・後藤(政)・永野・寺沢・孫・平井・尹亭仁・大里・(経)後藤(晃)・(経)兼子・(法)阿部・富谷	12	検討中

(名) 名誉教授
(非) 非常勤講師
(学外) 学外研究者